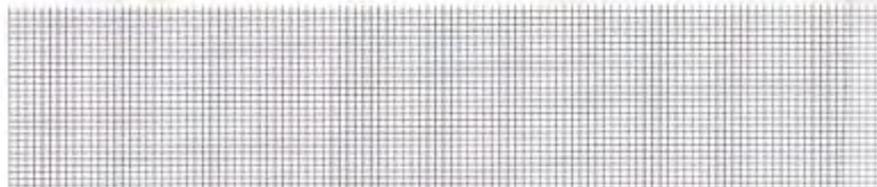


沖

8
2019

俳句雑誌【おき】



ささら波

能村 研三

辻堂の伯母さん

小学生の頃私の家に来る「辻堂の伯母さん」という人がいた。いろいろなことに博識で、父と親しく話す気さくな人であった。しかし、その伯母さんがどんな親戚関係にあるのかははつきりとわからなかった。

伯母さん夫婦の墓は私の家の菩提寺である東京谷中の延壽寺にあり、十年前位からその管理を引き受け、彼岸やお盆などには線香と供花を手向けている。しかし、家人から「伯母さんがどのような関係にあるのか」訊ねられても、顔は覚えていたものの明快な答えはできないでいた。

卯の花や雨の止み間の小働き

箱庭の類想の景でき上る

明け方は捨て苗のみな立ちあがり

ところで、六月の終わりに諏訪市俳句連盟からの依頼で「曾良随行日記と山本安三郎」という題で講演を行った。このことについて先般亡くなった安居正浩さんが「沖」平成二十八年七月号に書いておられるので、これを手がかりにその任を果たすことができた。

山本安三郎という人は「曾良随行日記」を発見し世に出した人である

振花のねぢり余りて素直なり

めまとひのまばたく毎に増えてをり

もう少し凶太く生きよ梅雨穂草

離陸待機茅花明りの中にな

長崎大村

御船蔵南風の入江のささら波

朝風や艇庫の裏の外階段

一部「俳壇」掲載句

が登四郎は「笠翁の芭蕉像」（沖）昭和四十六年一月号）で次のように述べている。

「掃雲（安二郎の俳号）という人は私の母方の伯父で、山本安三郎といって谷中清水町に医師をしていた。私の家とのゆかりは祖母同士が姉妹であったという、所謂遠縁関係にあつたが、父はこの伯父の人柄を尊敬して兄事していたので、山本家と能村家とはまるで肉親のような関係にあつた。私の名もそうであるが子供の名は皆この伯父がつけた。また父は家族の一身上の相談はすべてこの伯父にしていたようである」このように親しくしていた安三郎は医者のかたわら、俳諧の宗匠をしていた。病弱な登四郎に何か好きなことをやらせた方がいいと考えた安三郎は、中学生の頃から俳句の手ほどきをはじめた。

講演のために下調べで『能村登四郎読本』を改めて読んでみたところ、この辻堂の伯母さんは山本安三郎の娘で、安三郎が芭蕉の弟子の破笠が芭蕉像の型をとって平櫛田中に作らせたものの二体を登四郎に譲ってくれた人である。

今回の講演のお陰でこの伯母さんの謎となっていたことが一気に解き明かされた。

桑の実

森岡 正作

ハーレーの革ジャンに星麦の秋
画鋏打つやうに柵田の余り苗
桑の実にある少年期の瑕瑾
岸に寄る浮巢を風の吹き戻す
青時雨肩に野性の蘇る
万緑に佇み男充電中
老鶯や碑になき石工の名

羽抜鶏

羽抜鶏の句に出会うと、田舎で過ごした少年時代を思い出す。家の裏には鶏小屋があつて、その周囲を金網で囲い、毎年二十羽ほど飼っていた。卵ときりたんぼ鍋用の鶏であり、餌をやるのも、しまいに捌くのも僕の役目であつた。

盛夏の暑い最中でも水を撒いてやると、鶏は小屋を出て喜んで動き回るのであるが、羽根の抜けた雄鶏は、走るとエリマキトカゲのようで面白かつた。後年、その景を思い出し、〈羽抜鶏真昼のダツシュ繰り返す〉へ羽抜鶏跳んで四五歩を省略す〉と詠んでみた。正面から挑んだつもりでも、私の未熟な羽抜鶏の哀しさか、季語集にある「みすばらしく、滑稽で鈍い」という羽抜鶏の説明の域をのがれ切れない。

それでも、登四郎先生の〈羽抜鶏身を忘じての威丈高〉へ羽抜鶏羽ばたくときの胸の張り〉などの句に触れてみると、詠みどころが似ているように思えて、少し安堵出来るのである。

能村登四郎の軌跡〔12〕

能村 研三

元旦の最初の客の皓齒かな

『民話』昭47

「沖」が創刊されて二年目の新年を迎えた。登四郎は一見不愛想なようにも見え
るが、自ら人と会って話をするのを好んでいた。「沖」には若手の俳人も多く集ま
り始めていた時期で、若手俳人と自由に俳句の話をするのを楽しみにしていた。い
つも元旦最初にたずねてくる人によってその一年を占うようなことがあったが、こ
の年は笑うと白い歯が印象的な元気のよい若者の年賀をうけ幸先のよい年であるこ
とを実感した。登四郎自身も元気な若者たちからのパワーを浴びることを喜んでい
たようであった。

明るさに径うすれゆく芽吹山

『幻山水』昭47

第五句集『幻山水』の巻頭の句。登四郎は句集の頭に据える句にはいつも気を遣
う方であった。自らが「この句は明るくてすんなりしているので好きだ」と言っ
ているが、『幻山水』という句集名は雪舟の「胸裡山水」の画法をしきりに考える癖
になったので、そんな発想で名付けたと述べている。枯れてひっそりしていた山も
春の訪れとともに、木々が芽吹き草は萌え出し山々は瑞々しい命で満たされ、あま
りにも明るい光のせいで歩く先の径が次第にうすれていくようにも見えた。



鍬研いで忘れしころの雪降らす

『幻山水』昭47

登四郎が「誰にほめられたという句ではないが、何となく好きな句でよく色紙や短冊に書く。書きよい俳句のひとつ」と述べているが、私が持っている数少ない登四郎による茶掛の軸にこの句が書かれている。鍬は農作業で刃が切れなければ土を切る時に仕事の効率が悪くなるので、農閑期にはよく研いで春耕の時を待つ。そんな時思いもかけない雪が降ってきた。もう雪のことなどすっかり忘れていたのに春を待つ気持がにわか募ってきた。

形代の襟しかと合ふ遠青嶺

『幻山水』昭47

六月の晦日に行われる祓の神事で茅の輪を潜り厄を祓い浄め、神社から配られた人形に身体の災いを移し川に流して礫や祓を行う。奉書を裁断したものが襟の合せ目が人間のもののようにみごとであった。この合わせ目に願い事をしっかりと託した安堵の気持が「遠青嶺」の季語に象徴されている。登四郎はこれまでに「形代」の句は全く無かったが、この時から「形代」を好んで詠み全句集には十三句が収められている。ちなみに「茅の輪」の句は全句集には七句が収められている。

蒼茫集



蜜だんご

溯上千津

朱塗り

吉田政江

* 退路なかりし日の師を思ふ真炎天
老いの細道見失ふまじ夏がすみ
亡夫の知らぬ老年われはリハビリに
瘧となる失態いくつ梅雨青し
黙考夜干し孤独を友に蜜だんご
自分の殻は己で破り蟬現る

青田風

望月晴美

* 青田風田を掃くやうに拭くやうに
照り降りの忙しきひと日花菖蒲
咲き満ちて明月院黄泉の国とも紫陽花寺
水無月の満月やその川の面
洗ひたる髪に命の艶もどる
白靴になりたちまち若き歩幅

木曾駒の眼の色深く柿若葉
醜草の畦に息づき走り梅雨
人寄れば作柄を言ふ麦の秋
* 何の贖罪なめくぢに殻のなし
ひなげし我孫子吟行真つ赤竜の化神の布施弁天
青田風伽藍の朱塗り浮き立てり

徒

千田百里

* 徒行き関東大会吟行二句て偲ぶに叶ふ朴花忌
万緑や檜句碑はいま国府守り
登校の銀輪茅花流しかな
若き父らのまぶしき父の日の車中
夏草を行くは水中歩行めく
吾の留守の夫を養ふ冷蔵庫

黎伸ぶ 甲州千草

ひと吹きで消えさうな月梅雨近し
万緑や入母屋破風の屋根力
*黎伸ぶ婆の杖でも作らうか
回らずの風車葎切騒ぎても
なほ深き赤もて廃たれゆくポピー
時の日やベルト縮めるための穴

甘美なる 楠原幹子

竹皮を脱ぐや令和に早馴染み
朴の花月と交信してゐたり
*甘美なる文芸の毒桜桃忌
茅花流し歩幅小さくなつてをり
丹田にひびくケーナや麦の秋
鉄砲百合向きを変へると言はれても

星涼し 宮内とし子

*仏像の海外出張星涼し
夏帽子とりて拜せる先師句碑

炊き上げてみどり際立つ豆御飯
父の日や奈良墨残る硯箱
酔味噲やや甘めに佐久の洗鯉
道化師の地べたに置ける夏帽子
韋駄天走り 千田敬

箱めがねじゅごん儒良の尾鰭見え隠れ
断捨離の予定全集曝しけれ
土俵踏む素足青春といふむかし
母の日よははの鼻唄懐しく
梅雨きのこ朝の路傍にぼこと現れ
*レーダーに韋駄天走りの大夕立
豆の花 菅谷たけし

*畝といふ小暗き湿り豆の花
夏落葉鋳物のすれるやうな音
五月来る暇にぎはふ人・重機
砂州に散る魚のごとしや竹落葉
出入りなき昼の教会アマリス
五月鯉遠近法なき川流し

潮鳴集



父親参観日

小林陽子

目に海を孕んでゐたる夏帽子
緑蔭へ弓矢一閃放たれり
竹の皮ひらりそろそろ変声期
着水の落下傘めく海猫の群
*じやがいもの咲いて父親参観日

押し合ふ

菊地光子

*でで虫や今日に終らぬけふのこと
流れ藻に雑魚の押し合ふ朝ぐもり
柿若葉たしかなものに子の歩み
石棺へ御霊しづめの夏落葉
実篤の絵皿昭和の夏座敷

詰襟写真

大沢美智子

しばらくを仰ぐまぶしさ朴の花
辣蕪漬け十指すこやかなる日暮
イヤホンの紐絡み合ふ薄暑かな
磔刑像の足裏を照らす梅雨の燭
*父の日の父の詰襟写真かな

在来線

七田文子

在来線乗り継ぐ旅や青田風
麦秋や遠ざかるもの多くして
*かたつむり迷うた時は跳んでみよ
雨粒の光りし茅の輪くぐりけり
虹消えし渚にひとつパイプ椅子

飛鷹選評



能村 研三

雷鳴や太古の記憶動き出す 永澤千恵子

雷には恐ろしい面と、恵みをもたらす面との二つが存在しているようだ。雷を「神鳴り」と言うくらいで、音が神の鳴らす音なら、光は稲妻として古代から雷光が稲穂を実らせると信じられてきた。実際に雷の多いときは降水量や日照、気温など、稲の生育に良い条件が揃うことから雷は神様が鳴らすものと考えられていた。広大な大地が雷火に照らされる瞬間は、太古の昔へ記憶が遡っていくように感じられた。

荒神輿沈むときこそ力込め 鈴木 光影

行徳の五ヶ町の大祭の荒神輿を思い出した。三年に一度の渡御では、約四百八十キロある神輿が、白装束のみ手二十四名の男性で担がれる。担ぎ方も独特で、神輿を頭上高く片手で上げる「さし」、高く投げ上げてから受け止める「放り受け」、地面すれすれまで下げる「地すり」など、ほかの地域の担ぎ方とは違う。神輿を高く投げ上げるには沈んだ時に力を十分に蓄えて一気に放り上げる。その様子をきっちり写生している。若手作家の力強い作は頼もしい。

日焼せし腕押し合ふ沖魚汁 かどうかひろこ

沖魚汁は「おきなじる」と読み、海でとったばかりの魚で作った汁のことである。かつて漁師達は漁にでるときは数日分の食糧を積み込み、沖泊まりしながら漁を続けた。沖での食事は獲れたての魚を忙しい漁の合間に時間を惜しんで調理するので、汁物など手間の掛からないものになる。日焼けした漁師たちの邊しい腕が見えてくるようだ。

振り上げし拳どうする葱坊主 村上 葉子

この句、日常の出来事であるがドラマがあって面白い。喧嘩している当人同士もさることながら、周囲の人たちもこの場をどう収めるかやきもきしている。落とすどころをうまくつけないと収まりがつかなくなるので、まさに振り上げた拳をどう収めるかが衆目的。葱坊主のとりあわせが面白い。

打つことを知らずましてや蠅叩 仲里 貞義

蠅叩は懐かしい季語だが、いまの子供のほとんどは、もう蠅叩は知らないだろう。私たちが育ったころはどここの家庭にも蠅叩は必ずあった。先師登四郎だと、ここで手頃な俳誌が出てくるところだが、今は殺虫剤があるので、蠅叩きどころか叩いて殺すことすらも知らないのだろう。

妬心ふと棘を研ぎたる夜の薔薇 五十畑悦雄

一瞬恐ろしさを感じる句である。綺麗な薔薇に棘がある。薔薇はとても美しいが、迂闊に手を出すと、棘でけがをする。人間の世界でも綺麗だからと外見だけで判断すると火傷することもある。薔薇は夜に棘を研いでいるのだろうか、と思うとより恐い。

沖作品



能村研三選

聖五月銀紙むけば白き菓子

岩手

永澤千恵子

* 雷鳴や太古の記憶動き出す

草笛や話せば郷里同じ人

木曾古道触るばかりに朴の花

夏燕みな旅人の聲の路

真つ昼間化けて出るなら立葵

東京

鈴木 光影

* 荒神輿沈むときこそ力込め

紫陽花は水の花束今朝の街

駐車せりみな夏空を映し出し

さくらんぼ恋の心は丸く書く

耳熱く火蛾の翅音を盲猫

海峡を境に海霧の濃き淡き

群青の海をひきずり岩つばめ

* 日焼せし腕押し合ふ沖魚汁

松前の屋並みも見ゆる盛夏かな

青森

くどうひろこ

* 振り上げし拳どうする葱坊主

千葉

村上 葉子

屈まりて牡丹一花に向き合へり

素寒貧それはさておき初鯉

脱ぎきれぬ皮ぶらさげて今年竹

葉桜となりていつもの道となる

知覧八女嬉野つづく新茶かな

埼玉

仲里 貞義

* 青空を四角に切りて田水張る

打つことを知らずましてや蠅叩

白玉や丹の継橋の袂にて

十葉の明るき朝よ昨夜の雨

田植機の優者のごとき鉄の指

妬心ふと棘を研ぎたる夜の薔薇

* 万緑や森に木の椅子木の机

淋しさを背負ひて雨後の蝸牛

溪流の香り丸ごと山行魚食む

栃木

五十畑悦雄